

作成動詞の意味分析

高木 睦美

1. はじめに

本論文では語彙概念構造を用いて作成動詞の意味の分析を行う。作成動詞とは「ケーキを焼く」「セーターを編む」「みそ汁を作る」と言った場合の「焼く」「編む」「作る」などの動詞のことで、創造動詞とも呼ばれる。語彙概念構造は、例えば次のように表記される。

[[x ACT ON y] CAUSE [y BECOME z]]

これを「太郎が花瓶を割った」という文の動詞「割る」の語彙概念構造として説明すると、x は主語の太郎であり、y は目的語の花瓶である。z には動詞に固有の意味が代入され、ここでは「割れた（一体性を欠いた）状態」を表す。この語彙概念構造は「太郎が花瓶に働きかけを行い、その結果、花瓶が割れた状態に変化すること」を表している。なお、本論文では、小野（2005）に則り、CAUSE より前の[x ACT ON y]を起因事象、CAUSE より後ろの[y BECOME z]を結果事象と呼ぶ。

以下、第2節では動詞の語彙概念構造および作成動詞についての先行研究を紹介し、先行研究における作成動詞の分析の問題点を踏まえて、2つの代案を提示する。第3節では、「焼く」「編む」に固有の意味としてどのような働きかけの手段や変化後の状態が語彙概念構造に追記されるべきかを明らかにする。その結果を踏まえ、第4節では第2節で挙げた二つの代案を検証し、「ケーキを焼く」「手紙を焼く」のように作成動詞と状態変化動詞の両方に使用できる動詞の意味の共通点を重視し、どちらの用法にも当てはめられる語彙概念構造、[[x ACT] CAUSE [y BE AT z]]がふさわしいことを示す。第5節では、この語彙概念構造が作成動詞としてのみ使用可能な「作る」の分析としても適切であることを示し、第6節で本稿の作成動詞の分析をまとめる。

2. 先行研究

2.1. 語彙概念構造と動詞の分類

本論文では、動詞の分析に「語彙概念構造 (Lexical Conceptual Structure 以下 LCS)」を用いる。影山 (1996) によれば、LCS とは、動詞が表す概念的な意味を抽象的な述語概念で表示した構造のことである。枝分かれ図あるいは角括弧を用いて表示され、BE, AT などの述語、y, z などの項、STATE, LOC などの範疇で構成される。状態・出来事・行為をまとめて事象 EVENT と呼び、その中で状態を表すものは STATE と呼んでいる。「物 (Thing)」「場所 (Place)」などの名詞の特性を表記する場合もあると影山は述べているが、本論文では引用元で用いられている場合を除いて省略する。影山・由本 (1997) は、x, y, z の意味を次のように解説している。x と y は変項と呼ばれ、具体的な文において主語や目的語が対応する。z には具体的な動詞の分析においてはその動詞に指定された意味が代入される場合があり、その際 z は定項となる。由本 (2011) は、主な意味述語として表 1 のものを挙げている。

(表 1) LCS の主な意味述語

BE	静止した状態を表す。
BECOME	変化を表す。
ACT (ACT ON)	継続的または一時的な活動を表す。働きかけの対象を項に取る場合は、「ON」と共に用いられる。
CAUSE	原因事象または使役者と、結果事象の因果関係を表す。
AT	BE と共に用いられ、項の物理的位置あるいは状態を表す。

由本 (2011: 22-23) より作成

2.2. 動詞の分類

影山・由本 (1997) は動詞を、「状態動詞」「到達動詞」「活動動詞」「達成動詞」の四つに分類し、それぞれの LCS を以下のように分析している¹。() 内は任意の要素である。

(1) a. 状態動詞 : [STATE y BE AT z]

例 : *be, remain, stay*

b. 到達動詞 : [EVENT BECOME [STATE y BE AT z]]

例 : *become, fall, arrive, happen*

c. 活動動詞： [EVENT x ACT]

例： *talk, dance, work, shine* (継続活動の自動詞)

もしくは [EVENT x ACT (ON y)]

例： *kick, hit, kiss* (接触や打撃の働きかけ動詞)

d. 達成動詞： [[EVENT x ACT (ON y)] CAUSE

[EVENT BECOME [STATE y BE AT z]]

例： *break, kill, build, put, set, hang*

また、影山・由本は自動詞と他動詞を次のようにも分類している。自動詞には「非対格自動詞」と「非能格自動詞」があり、他動詞には「状態変化他動詞」と「働きかけ他動詞」がある。上記の四つの分類との対応は次の表2のようになる。

(表2) 動詞の分類

自動詞	非対格自動詞	(1) a. 状態動詞	(1) b. 到達動詞
	非能格自動詞	(1) c. 活動動詞 (「ACT」のみのもの)	
他動詞	働きかけ他動詞	(1) c. 活動動詞 (「ACT ON y」のもの)	
	状態変化他動詞	(1) d. 達成動詞	

影山・由本 (1997: 7) より作成

一方、由本 (2011) は、自動詞を非能格自動詞と非対格自動詞、他動詞を使役動詞と働きかけ動詞に分け、それぞれの動詞のLCSと、それに属する動詞の例と、その動詞の特徴を以下のように述べている。

(2) a. 非能格自動詞： [x ACT]

例： *talk, laugh*

主体の意図的な行為を表す。

使役動詞の他動詞構造 (2c) の CAUSE の左側の起因事象に対応する。

b. 非対格自動詞： [y BE AT z] もしくは [y BECOME [y BE (AT z)]]

例： *be, remain, appear*

存在や出現を表す。LCS 構造は二つあり、前者は「y が z に存在する状態」を、後者は「y が z に存在するようになる変化」を意味する。使役動詞の他動詞構造の CAUSE の右側の結果事象に対応する。

c. 使役動詞： [x ACT ON y] CAUSE [y BECOME [y BE AT z]]

例： *kill, break, crash, smash, shatter, bend, flatten, mix, melt, freeze* 殺す、
割る、溶かす、砕く、裂く、固める、広げる、作る、書く、編む
z の部分は動詞が含意する結果状態を示す定項である。

働きかけとそれによる変化という二つの下位事象の複合体である。

d. 働きかけ動詞： [x ACT ON y]

例： *push, hit, touch, strike, knock, wipe, touch, pat, rub, bite* 叩く、打つ、
撫でる

働きかけの部分のみから成る。目的語の位置変化や状態変化を表す下位事象
が含まれない。目的語に対する働きかけはあるが、目的語に変化が起こった
か否かの含意がない。

由本 (2011: 27-43)

由本は自動詞か他動詞かに基づいて分類を行っており、状態動詞と到達動詞を分けず、
非対格自動詞としてまとめて扱っている。一方、影山・由本は、自動詞か他動詞かの区
別によらない、動詞の意味の構造による四分類も提案しており、活動動詞では非能格動
詞と働きかけ他動詞を同じ分類にまとめている。分類は異なるものの、動詞の意味とし
て想定する LCS の範囲については差はない。

2.3. 先行研究における作成動詞の分析

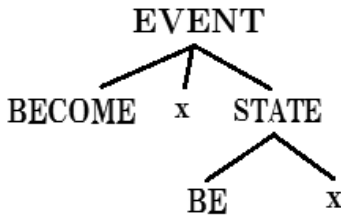
上記の影山・由本 (1997) は、作成動詞の一つである *build* を、達成動詞であり状態変
化他動詞でもあると分析している。達成動詞の LCS は (1d) である。由本 (2011) は、
「作る、書く、編む」などの作成動詞を他動詞の使役動詞と分析し、LCS は (2c) を当
てている。

(1) d. [EVENT x ACT (ON y)] CAUSE [EVENT BECOME [STATE y BE AT z]]

(2) c. [x ACT ON y] CAUSE [y BECOME [y BE AT z]]

これに対して金水 (1994) は、対象変化自動詞の LCS を (3a)、出現動詞の LCS を (3b)
とし、それらの他動詞形である対象変化他動詞は (3a) を、作成動詞は (3b) を、それ
ぞれ含むとしている。

(3) a.



b.



金水 (1994: 38-39)

この金水の分析を、影山 (1996) は次のように説明している。(3b) の LCS は、BECOME が STATE だけを項に取り、その STATE の発生を意味する構造であり、事態の発生や事物の出現を表す。appear, occur のような発生・出現の動詞はこの構造を与えられ、make, build のような生産・作成の動詞の LCS はこの構造を含む。一方、(3a) の構造を持つ wilt, break などの対象変化動詞では、元の状態の対象物が BECOME の項として設定されている。以上をふまえて、影山は自動詞と他動詞を(4)のように分析している。なお、影山は、CONTROL は結果の成立を直接的に左右することを示すが、結果の成立を含意する CAUSE と違い必ずしも y の成立を含意する訳ではないとしている。

(4) a. 出現・発生動詞： [EVENT BECOME [STATE y BE AT z]]

b. 作成動詞 (make)： [x CONTROL [BECOME [y BE AT z]]]

c. 状態変化自動詞： [EVENT y BECOME [STATE y BE AT z]]

d. 状態変化他動詞 (break)： [x CONTROL [y BE BROKEN]]]

「幽霊が現れる」「事件が発生する」など、何らかの状態が生じる事を表す LCS は (4a) である。自動詞構造であるこの LCS の前に CAUSE や CONTROL が付き、使役他動詞の構造になったものが、作成動詞の LCS の (4b) である。「魚が腐った」などは (4c) の語彙概念構造を持つ。これは、腐った魚がいきなり現れるのではなく、もともと新鮮な魚があり、それが変化して腐った状態になったことを表している。BECOME の前に置かれた y は、BE の主語 y と同じだが、意味としてはそれが状態変化を被る前の姿を表す。このように、変化前の存在が認識される時には、BECOME の前にも y が付く。

これに対して、由本 (2011) は作成動詞の一つである build の LCS として以下の(5)を提案している。また、小野 (2005) は build を含めた使役動詞の LCS を(6)としてお

り、さらに状態変化動詞にも創造動詞にも解釈される動詞 *bake* を、どちらに解釈される時でも概念構造は変更されないと述べている。

- (5) [x CAUSE [BECOME y BE [AT z]]] 由本 (2011: 175)
(6) [[x ACT] CAUSE [y BECOME <STATE>]] 小野 (2005: 107-108)

2.4. 先行研究の作成動詞の LCS の問題点

以上の先行研究における作成動詞の LCS の分析には、さらに検討すべき点がある。まず、(2c) では起因事象において主語 *x* が目的語 *y* に働きかけを行っている。また、(2c) と (6) の結果事象において、目的語 *y* が変化を被るものとして指定されている。しかし、「ケーキを焼く」と言った場合の目的語「ケーキ」は、働きかけが終わって初めて存在するようになる。働きかけの前の段階では、小麦粉や砂糖や卵が混ざり合ったものであり、ケーキではない。さらに、「詩を作る」のような例では、起因事象に *y* に相当するものが存在しない。

次に、影山 (1996) が述べている通り、(4a) は「幽霊が現れる」「事件が発生する」などの何らかの状態が生じる出現動詞は正しく表すことができるが、その前に CAUSE や CONTROL を付け加えた使役他動詞の構造 (4b) は、作成動詞としての「焼く」「編む」の意味を十分捉えてはいない。なぜなら、影山はこの LCS は BECOME 以下の状況がなにもない所でいきなり起こったことを表すと述べているが、「ケーキを焼く」「セーターを編む」のような場合には、材料となる小麦粉や砂糖、または毛糸があり、それを元に加熱したり構造を与えたりして作成が行われている。「焼く」も「編む」もケーキやセーターをいきなり出現させることを表す動詞ではない。

2.5. 二つの代案

上記の問題点を克服する LCS を明らかにするため、まず二つの代案を提示する。これらを使って第3節で「焼く」「編む」の意味を精査し、その結果を踏まえて二つの代案の優劣を見極める。

2.5.1. 代案1

代案1では、作成を行う際に必ず存在する材料を重視する。

作成動詞と状態変化動詞の違いとして、目的語が挙げられる。例えば、「手紙を焼く」

と「ケーキを焼く」を比較する。前者の「焼く」は状態変化動詞である。目的語の手紙は、働きかけが起こる前に既に存在しており、働きかけを被る。一方、後者の「焼く」は作成動詞である。目的語のケーキは、働きかけが起こる前には、材料となる小麦粉や砂糖などが混ざり合ったものである。働きかけられて、変化が起こり、それが終わって、初めてケーキになる。このような目的語の性質の違いを、影山(1996)は「被動目的語」と「結果目的語」と呼び分けている。「手紙を焼く」のような文の目的語を被動目的語、「ケーキを焼く」のような文の目的語を結果目的語と呼ぶ。本論文もこの呼称に準じる。

これを踏まえて、由本(2011)が「作る」などの使役動詞のLCSとしている(2c)に、「太郎が手紙を焼く」と「太郎がケーキを焼く」を当てはめて考察する。

(2) c. [[x ACT ON y] CAUSE [y BECOME [y BE AT z]]]

「手紙を焼く」は次のように分析できる。太郎が手紙に働きかけた結果、手紙は、焼かれた状態の手紙に変化した。次に「ケーキを焼く」の場合は、太郎がケーキに働きかけた結果、ケーキが、焼かれた状態のケーキに変化したと分析できる。しかし、ケーキは結果目的語であるので、被動目的語を取る文と同様にLCSに代入すると、文が表す「太郎が何かしらのケーキの材料となるものに働きかけた結果、それらが焼き上がった状態のケーキに変化した」という現象とは違った分析になってしまう。

そこで、結果目的語を取る文では、yを使わず、「OBJECT」と「MATERIAL」という二つの新しい意味述語を使うとするのが代案1である。「OBJECT」は「文中に目的語として現れるもの」を代入する。「MATERIAL」には「目的語を作るための材料と推測されるもの」を代入する。この代案によれば、作成動詞のLCSは(7)になる。これは、主語xが材料MATERIALへ働きかけを行った結果、材料が目的語OBJECTと呼べるものに変化したことを表している。

(7) [[x ACT ON MATERIAL] CAUSE [MATERIAL BECOME OBJECT]]

2.5.2. 代案2

代案2では、状態変化動詞と作成動詞のどちらにも解釈できる動詞において、どちらの場合でも共通する意味の特徴を重視する。つまり、「手紙を焼く」でも「ケーキを焼く」でも、動作が終了した時に、手紙やケーキに火が通ったことで、焦げ目がついたり黒こ

げになって炭になったりという何かしらの変化が起きるといふ、「焼く」という動詞を使った文である以上、共通する意味を重視する。そのため、この代案で提案する LCS は状態変化動詞と作成動詞に共通して当てはめられる。

また、この代案では、目的語に取られているものが「起因事象において変化前に既に存在し、働きかけを受けたか」と「結果事象において変化が起こる前に存在しているか」には言及しない。例えば、「手紙を焼く」のような状態変化動詞であれば起因事象や結果事象の変化前に目的語の手紙が存在しているが、その可能性を否定しない。「ケーキを焼く」のような作成動詞であれば、起因事象や結果事象の変化前にケーキの生地などの材料が存在しているかも知れないが、その可能性も否定しない。LCS は(8)のようになる。これは、主語 x がなんらかの行動をした結果、目的語 y が z という状態になったことを表している。

(8) [[x ACT] CAUSE [y BE AT z]]

2.5.3. 二つの代案のまとめ

以上、本節では作成動詞の先行研究を振り返り、その問題点を解決する足がかりとして、二つの代案を提示した。二つの代案では、状態変化動詞と作成動詞の LCS は以下のようなようになる。

代案 1

(2) c. 状態変化動詞 : [x ACT ON y] CAUSE [y BECOME[y BE AT z]]

(7) 作成動詞 : [[x ACT ON MATERIAL] CAUSE [MATERIAL BECOME OBJECT]]

代案 2

(8) 状態変化動詞・作成動詞 : [[x ACT] CAUSE [y BE AT z]]

動詞には、二つの代案が表す作成動詞に共通の LCS に加えて、動詞ごとに固有の働きかけの手段や変化後の状態の指定がある。次節ではこれを検証する。まず「焼く」と「編む」を検証し、その後、それらの二つの動詞を用いて、二つの仮説のどちらがより適切かを判断する。最後に、作成動詞「作る」の検証を行う。

3. 動詞に固有の意味の検証

3.1. 「焼く」の検証

3.1.1. 「魔法使い」の例を用いた検証

現実では起こりえないという理由で不適格となる文が、ファンタジーの世界という前提であれば動詞の用法としては適格となる場合がある。そこで、本節では「魔法使いが魔法で……してくれた」という例文を用いて検証する。

- (9) a. 魔法使いが魔法で、ケーキを焼いてくれた。
- b. 魔法使いが魔法で、ケーキを作ってくれた。

(9a) は作成動詞と状態変化動詞のどちらにも解釈される動詞「焼く」が作成動詞として使われている文であり、(9b) は作成動詞としてのみ使う動詞「作る」の文である。これらの文が表す意味の範囲を検証するため、(10)に三つの状況を設定した。

- (10) a. 魔法使いが杖を一振りすると、机の上にあったケーキの材料が、ひとりでに混ざり、型に入り、オープンに入り、焼きあがった。その後、クリームやいちごなどがひとりでに飾り付けをして、ケーキが完成した。
- b. 魔法使いが杖を一振りすると、机の上にあったケーキの材料が、ひとりでに混ざり、型に入り、オープンに入れずとも焼きあがった状態になった。その後、クリームやいちごなどがひとりでに飾り付けをして、ケーキが完成した。
- c. 魔法使いが杖を一振りすると、なにもなかった机の上に、スポンジケーキが出てきた。次にもう一振りすると一瞬でクリームが塗られた状態になり、もう一振りするといちごなどのデコレーションがされて、ケーキが出来上がった。

(10abc) の状況は、LCS に付け加えられる指定の働きかけが行われたか、指定の状態への変化があったか、作成の作業に材料があったかの三点の有無が異なるように設定してある。どの要素を含めたか、含めなかったかを表3にまとめた。下に、二つの代案のLCSを用いて、表3の要素がLCSのどこに付け加えて指定されるかを示した。「材料」の項目は、代案1のLCS(7)の「MATERIAL」に対応する。

(表4) 状況 (10abc) における (9 ab) の適格性

	(9) a. 焼く	(9) b. 作る
(10) a.	適格	適格
b.	不適格	適格
c.	不適格	適格

3.1.2. 未完・失敗の可能性

3.1.2.1. 「もう少しで」を付け加える検証

本節では、どの程度火が通れば、代案2のLCS(8)の結果事象に付け加えられている指定の通り、火が通った状態になったと認められるかを検証する。

由本(2011)は、動詞 kill のLCSに(2c)を想定すると、そのLCSのどの部分に almost がかかるかによって、John almost kill the cat. が次の3つの状況を表し得ることが正しく予測できると述べている。

(11) a. almost が CAUSE にかかる場合：

John は猫に殴りかかったが、その攻撃は猫に当たらなかった。

b. almost が起因事象にかかる場合：

John は猫に殴りかかろうと思ったが、思いとどまった。

c. almost が結果事象にかかる場合：

John は猫に殴りかかって大けがをさせたが、その後、猫はどうか回復した。

これを踏まえて、作業の中断を表す「もう少しで……するところだった」という形を使って検証を行う。まず、作成動詞のLCSを(7)もしくは(8)と仮定し、「太郎はもう少しでケーキを焼くところだった」という文が表す状況の範囲を由本にならって設定し、考察する。

(12) a. 「もう少しで」が CAUSE にかかる場合：

太郎がケーキの材料をオープンに入れ、火にかけたが、それはケーキに火が通ることを引き起こさなかった。

b. 「もう少しで」が起因事象にかかる場合：

太郎はケーキを焼こうと思っていたが、やめてしまった。

c. 「もう少しで」が結果事象にかかる場合：

太郎はケーキの材料をオープンに入れ、ケーキに火が通りそうになったが、ぎりぎりのところでケーキにはならなかった。

「もう少しで」のかかり方によって、(13abc) の3つの状況を表すことができるはずだが、実際には、(13ac) の解釈は難しい。これは、火にかけるとすぐに、ほんの少しであっても火の通った状態になると考えられるので、起因事象で火を用いて働きかけを行ったとすると、その後の CAUSE や結果事象が成立しなかったことは考えにくいためであろう。つまり、少しの時間であっても火を用いて働きかければ、わずかであっても火が通る。この程度の状態変化であっても「焼く」という行為が行われたと判断されるのである。以上の考察の妥当性をさらに検証する。

3.1.2.2. 作業の失敗を表す文を付け加える検証

由本によれば、作成動詞を含めた (2c) の LCS を持つ動詞は、目的語に影響が及び変化が起こったことを含意し、それをキャンセルする文は不適格になる。例えば The cat killed the mouse, but the mouse didn't die. は不適格であると由本は述べている。同様に、ある表現が「ケーキを焼いた」の文の後に不適格にならずに続くことが出来れば、その表現の意味は「焼く」という作成動詞の含意に矛盾しないと考えられる。そこで、以下の、ケーキを焼く作業の失敗を表す (13abd) と、成功を表す (13c) の例文を用いて検証を行う。

- (13) a. ケーキを焼いた。しかし、生焼けだった。
- b. ケーキを焼いた。しかし、黒焦げだった。
- c. ケーキを焼いた。とてもおいしく焼けていた。
- d. # ケーキを焼いた。しかし、全く火が通っていなかった。

(# は文章として矛盾があることを示す。)

(13a) は火がほとんど通っていないことを、(13b) は通り過ぎたことを、(13c) は適度に通ったことを表し、多少なりとも加熱による変化が起こったことを表しており、これらは適格である。(13d) は全く火が通らなかった、つまり加熱による変化が全く起こらなかったことを表し、不適格となる。このことから、ほんの少しであっても火が通れば

「焼く」という動詞を使ってよいことが分かる。

3.1.3. 「焼く」の検証のまとめ

代案1・代案2の作成動詞のLCSに、検証した「焼く」の意味を追記すると、以下のようになる。(7)の[x ACT ON MATERIAL]と(8)の「x ACT」に「火を用いて」という指定が、(8)の[y BE AT z]には「火が通った状態になる」ことが付け加えられる。

(7) [[x ACT ON MATERIAL] CAUSE [MATERIAL BECOME OBJECT]]

↑

<火を用いて>

(8) [[x ACT] CAUSE [y BE AT z]]

↑

↑

<火を用いて>

<火が通った状態になる>

加えて、3.1.2.では、どの程度火が通れば、(8)の「y BE AT z」に付け加えられている指定の通り、火が通った状態になったと認められるかを検証した。その結果、働きかけられたものにほんの少しでも、あるいは過剰にでも火が通ってさえいれば「焼く」という動詞を使えることが分かった。

3.2. 「編む」の検証

3.2.1. 「魔法使い」の例を用いた検証

「焼く」以外の状態変化動詞と作成動詞のどちらにも使える動詞でも、同様のことが言えるのか検証するため、「編む」に3.1.1.と同様の検証を行う。「編む」と「作る」を用いた文(14)が表すことのできる意味の範囲を、表3に示された要素を考慮して設定した(15)の三つの状況を用いて検証する。表5にどの文がどの状況を表す時に適格となるかをまとめた。

- (14) a. 魔法使いが魔法で、セーターを編んでくれた。
- b. 魔法使いが魔法で、セーターを作ってくれた。

- (15) a. 魔法使いが杖を一振りすると、机の上の毛糸と棒針がひとりで動き出して、セーターを編み上げた。
- b. 魔法使いが杖を一振りすると、机の上の毛糸が編む作業をすることなくセーターに変化した。(一瞬で変化したなど。)
- c. 魔法使いが杖を一振りすると、なにもなかった机の上に、首回りから徐々にセーターが現れて、裾と両手の袖のところまで全てが出現してセーターとなった。

(表5) 状況 (15abc) における (14ab) の適格性

	(14) a. 編む	(14) b. 作る
(15) a.	適格	適格
b.	不適格	適格
c.	不適格	適格

「焼く」の検証と同様に、(15a) の指定の働きかけがある状況でのみ、「編む」を用いることが可能である。つまり、「編む」という動詞は、「糸状のものを一本ずつ組み合わせて形にしていく」という作業を行わない作成には使えないことが分かる。「作る」は「編む」で表される作成の動作においても、その手段を問わず使うことができる。

ここまでの「編む」の分析を、代案1・代案2のLCSに当てはめて分析する。代案1では起因事象で「糸状のものである材料に働きかけて組み合わせる」ことが指定される。代案2では起因事象において「糸状のものを組み合わせる動作をする」ことが、結果事象では「糸状のものが組み合わせられて形になっている」ことが指定されている。

3.2.2. 未完・失敗の可能性

本節では、どの程度作業が進めば仮説2のLCSの結果事象に付け加えられている指定である糸状のものが組み合わせられて形になっていると認められるかを検証する。「もう少しで……するところだった」を用いた例文、「太郎はもう少しでセーターを編むところだった」の表す状況の範囲を、(16)に示す三つの状況を用いて検証する。

- (16) a. 「もう少しで」が CAUSE にかかる場合：
太郎は毛糸を編んだが、毛糸は編まれた状態にならなかった。
- b. 「もう少しで」が起因事象にかかる場合：

太郎はセーターを編もうと思っていたが、やめてしまった。

c. 「もう少しで」が結果事象にかかる場合：

太郎は毛糸を編んでいき、あと少しでセーターが完成するところだったがやめてしまった。

「もう少しで」のかかり方で、(16abc)の3つの状況を表すことができるはずだが、(16ac)の解釈は難しい。まず、(16b)は働きかけさえ行っていないので、「太郎はもう少しでセーターを編むところだった」という文を用いて表現できる。次に、(16a)の毛糸を編んだがその毛糸は編まれた状態にならなかった仮定は、現実ではまず起こらない。編もうとしたが、編み方が間違っていて形にならず解けてしまった状況であれば、起因事象において働きかけに失敗したことになるので、(16b)と同じ分析ができる。最後の(16c)は、途中までは編んだことを表すので、上記の例文が表す意味としては不適格である。途中までは編んだのであれば、「もう少しで編み終わるところだった」「もう少しで編みあがる場所だった」などの表現が適切である。つまり、セーターが完成してなくても、動詞の要求する「指定の動作」と「指定の状態への変化」があれば、「編む」動作が完了したと判断される。

4. 二つの代案の検証

4.1. 代案の補足

代案1のLCSであればOBJECTに、代案2のLCSであればyに、文中で目的語に現れているものが代入される。では、「焼く」「編む」の検証において取り上げたように、作成の作業が失敗する例でも、同じように目的語に現れているものをそのまま代入できるのかを検証する。作成の作業が失敗した場合でも、指定の働きかけ方で、少しであっても、過剰であっても、指定の状態への変化を起こすことが出来ていれば、作成動詞「焼く」「編む」を用いることができる。しかし、出来上がっているものは、「黒焦げのケーキ」や「編みかけのセーター」である。これらを指して、「ケーキ」「セーター」と呼ぶことは適格かどうかの検証のため、以下に例をあげる。

まず、「黒焦げのケーキ」を検証する。Aさんがケーキを作っていたが、焼き過ぎて原形が分からないほど黒焦げにしてしまったとする。それを見たBさんが「これはなに？」と尋ね、Aさんが「ケーキだよ。焦げてしまったけれど。」と返事をした。それに対して、Bさんが「いや、これはケーキではなくて黒焦げのケーキだよ。」と訂正を入れ

ることではない。生焼け、もしくは焼き途中のケーキについても同じことが言える。オープンに入れたばかりのケーキを見たBさんが「これはなに？」と聞いて、Aさんが「ケーキだよ。」と答える。それに対してBさんが「これは小麦粉や砂糖や卵が混ざり合ったものに途中まで火が通ったもので、まだケーキとは呼べないよ。」と言うことはない。一方、まだオープンに掛ける前に、材料を混ぜている段階で、Bさんが「これはなに？」と聞いたとすると、Aさんは「小麦粉と砂糖と卵を合わせたものだよ。」と答えると考えられる。この段階では「何を作っているの？」と聞かれれば「ケーキだよ。」と答えても問題ないが、「これはなに？」と聞かれた場合は、「ケーキ」と答えるのは難しい。

次に、「編みかけのセーター」を検証する。Aさんがセーターを途中まで編んだところにBさんが来て、「これはなに？」と尋ねる。Aさんが「セーターだよ。いまはまだ編んでいる途中なんだ。」と返事をする。それに対してBさんが「いいや、これは毛糸を編んだものであって、セーターではないよ。」とは言わない。

これらのことから、作成の途中、もしくは作成に失敗していても、「黒焦げの状態のケーキ」や「編み途中の状態のセーター」であると考えられるため、文中に目的語として現れているものを直接代入して問題ない。

4.2. 二つの代案の検証

本節では、「焼く」と「編む」を、状態変化動詞として使った場合と、作成動詞として使った場合の比較を通して、二つの代案のうちどちらがより適切かを考察する。(17ac)は「焼く」「編む」を作成動詞として使用した文、(17bd)は状態変化動詞として使用した文である。これらの動詞を、代案1・代案2で提案したLCSを用いて分析する。

- (17) a. 太郎はケーキを焼いた。
- b. 太郎は手紙を焼いた。
- c. 太郎はセーターを編んだ。
- d. 太郎は花子の髪を編んだ。

代案1

(7) 作成動詞「焼く」「編む」

$[[\underline{x \text{ ACT ON MATERIAL}}] \text{ CAUSE } [\text{MATERIAL BECOME OBJECT}]]$

↑

<火を用いて>または
<糸状のものを組み合わせる>

(2) c. 状態変化動詞「焼く」「編む」

$[\underline{x \text{ ACT ON } y}] \text{ CAUSE } [\underline{y \text{ BECOME } [y \text{ BE AT } z]}]$

↑

↑

<火を用いて>または <火が通った状態になる>または
<糸状のものを組み合わせる> <糸状のものが組み合わせられて形になる>

代案2

(8) 作成動詞「焼く」「編む」、状態変化動詞「焼く」「編む」

$[[\underline{x \text{ ACT}}] \text{ CAUSE } [\underline{y \text{ BE AT } z}]]$

↑

↑

<火を用いて>または <火が通った状態になる>または
<糸状のものを組み合わせる> <糸状のものが組み合わせられて形になる>

まず、(17a)の「焼く」は、作成動詞「焼く」の分析である(7)と(8)が当てはまる。(7)は「太郎が火を用いてケーキの材料に働きかけた結果、ケーキの材料はケーキに変化した」ことを、(8)は「太郎が火を使って行動した結果、ケーキは火が通った状態になった」ことを表している。代案2のLCS(8)は(17b)で用いられている状態変化動詞「焼く」の分析にも当てはめることができ、この場合のLCSは「太郎が火を使って行動した結果、手紙は火が通った状態になった」ことを表している。代案1のLCS(2c)で状態変化動詞「焼く」を分析すると「太郎が火を使って手紙に働きかけた結果、手紙は火が通った状態になった」となる。

次に、「編む」の分析を行う。(17c)で用いられている作成動詞「編む」のLCSは(7)と(8)である。(7)は「太郎が糸状のものであるセーターの材料を組み合わせる働きかけを行った結果、セーターの材料はセーターに変化した」ことを、(8)は「太郎が糸状のものであるセーターの材料を組み合わせる動作をした結果、セーターの材料は組み合

わせられた形になった」ことを表す。(17d)の状態変化動詞「編む」のLCSは(2c)と(8)が当てはまる。(8)は作成動詞「編む」のLCSと同じである。(2c)は「太郎が糸状のものである花子の髪を組み合わせる働きかけをした結果、花子の髪は組み合わせられてみつあみなどの形になった」ことを、(8)は「太郎が糸状のものを組み合わせる動作をした結果、花子の髪は組み合わせられた形になった。」と分析できる。

代案2で提案したLCS(8)は、同じ形で作成動詞と状態変化動詞の両方の構造を問題なく分析できた。一方、代案1のLCSは作成動詞「焼く」「編む」と、状態変化動詞「焼く」「編む」の構造を、全く違うものとして捉えたものである。「焼く」「編む」のように状態変化動詞としても作成動詞としても使える動詞があり、その意味に共通する点があることを捉えるには、代案2のLCSがより適切である。

本節では、第2節で提示した二つの代案を検証し、作成動詞としても状態変化動詞としても使用可能である「焼く」「編む」の意味として、代案2のLCSがより適切であることを示した。作成動詞としてのみ使用可能な「作る」も同じLCSで捉えられるかについては、第5節にて考察を行う。

5. 「作る」の検証

本節では、状態変化動詞としては使用できない作成動詞「作る」を分析する。「焼く」と「編む」の分析において、「作る」という動詞は作成の手段を指定しないと仮定した。その仮定の検証を行う。例文(9b)は(10abc)の三つの状況、例文(14b)は(15abc)の三つの状況を表すことができる。これを踏まえて、新たに状況(10d)と(15d)を設定する。

- (10) d. 魔法使いが杖を一振りすると、なにもなかった机の上に、完成した状態のケーキが出現した。
- (15) d. 魔法使いが杖を一振りすると、なにもなかった机の上に、完成した状態のセーターが出現した。

同じく材料がない状況を想定した(10c)と(15c)では、魔法の力で徐々に形作っていくことを仮定したが、新たに設定したものでは、ケーキやセーターが一瞬で完成することを仮定した。この新たに設定した状況を、(9)と(14)の例文が表すことが出来るかを検証し、表6にまとめた。

- (9) a. 魔法使いが魔法で、ケーキを焼いてくれた。
- b. 魔法使いが魔法で、ケーキを作ってくれた。
- (14) a. 魔法使いが魔法で、セーターを編んでくれた。
- b. 魔法使いが魔法で、セーターを作ってくれた。

(表 6) (10d)・(15d) における (9)・(14) の適格性

	(9) a. 焼く・(14) a. 編む	(9) b. (14) b. 作る
(10) d. ケーキ	不適切	適切
(15) d. セーター	不適切	適切

指定の動作で働きかけていないので、「焼く」と「編む」は不適格である。作成の手段を問わない「作る」であれば、段階を踏まずにいきなり品物が完成した状況も表せる。

この分析に対して、「作る」であっても不適格で、例えば、状態変化動詞「出す」を用いて「魔法使いが魔法で、ケーキを出してくれた。」とする方が適切であるという反応も予想される。これは、以下の (10e) と (15e) に示す状況を想定したからと考えられる。

- (10) e. 魔法使いはケーキをリクエストされることを前もって分かっており、あらかじめケーキを作って用意していて、それを魔法で瞬時に移動させた。
- (15) e. 魔法使いはセーターリクエストされることを前もって分かっており、あらかじめセーターを作って用意していて、それを魔法で瞬時に移動させた。

(10e) と (15e) は、既に存在していたケーキやセーターが何らかの働きかけを被った結果、机の上に移動してきた状況であり、被動目的語を取り位置変化（すなわち移動）を表す動詞「出す」が当てはまり、「作る」はその瞬間に行われた行為を表すには相応しくない。

「作る」が、上で仮定した通り起因事象において作成の手段を指定しないとすれば、(10e) と (15e) の状況を表現できないのは結果事象に付け加えられる指定された変化が成立していないからだと予測される。では、「作る」の結果事象に指定された変化後の状態はどのようなものである必要があるかを (18) の例文とそれが示す状況で検証する。

(18) a. 例文：みそ汁を作った。

状況：豆腐やネギなどの具材を切って、鍋に入れ、煮立ててみそを加えた。

b. 例文：カップ麺を作った。

状況：お湯を沸かして、カップ麺を開封し、お湯を注いで3分待った。

c. 例文：デザートを作った。

状況：スーパーで買って来たゼリーとカットされたフルーツを一皿に盛り付けた。

d. 例文：デザートを作った。

状況：スーパーで買って来たゼリーを皿に出した。——不適切

e. 例文：牛乳を作った。

状況：牛乳を冷蔵庫から出して、コップに注いだ。——不適切

(18abc) は適格である。しかし、一つの物を皿やコップに移し替えるという移動だけを想定した (18de) は不適格である。状況の似ている (18cd) を比較する。まず (18d) の状況を考察すると、ゼリーは、スーパーで買って来た状態のまま、皿に出されていなくともデザートと呼ぶことができる。一方、(18c) では、ゼリーとカットされたフルーツを皿に盛り付けたことで、両方の要素を持った、ゼリーでもフルーツでもない「デザート」という新しい品物に変化したのである。さらに検証をするため、(18c) の状況を表す例文をいくつか想定すると、以下のようになる。

(18) c. 状況：スーパーで買って来た、カットされたフルーツとゼリーを一皿に盛り付けた。

例文1：デザートを作った。

例文2：カットフルーツとゼリーの盛り合わせを作った。

例文3：カットフルーツとゼリーを作った。(カットフルーツを作って、ゼリーを作った。) ——不適切

例文1と例文2は、ゼリーとフルーツの両方の要素を持った「デザート」もしくは「盛り合わせ」という新しい品物への変化を表しているので適切である。しかし、例文3はゼリーが皿に乗ったゼリーになったことと、フルーツが皿に乗ったフルーツになったことを別々に捉えている。その場合は、ゼリーもフルーツも皿に乗せる前と後で変化がな

く、「作る」で表すことはできない。

以上の検証から、作成動詞「作る」の LCS に付け加えられている指定された働きかけと変化を以下の(8)のように提案する。

(8) [[x ACT] CAUSE [y BE AT z]]

↑ ↑

(指定の働きかけなし) <働きかけを受ける場合、働きかけの前とは
性質・状態・用途などが異なるものに変化>

6. まとめ

本論文では、先行研究の作成動詞の LCS の問題点を指摘し、それを踏まえて新たな LCS を二つ提案した。作成動詞「焼く」「編む」「作る」の分析を以下の表7にまとめたように行い、提案した二つの代案の LCS のうち、(8)の LCS が適切であると判断した。この LCS は状態変化動詞と作成動詞のどちらの分析にも使用でき、状態変化動詞と作成動詞のどちらにも使われる「焼く」「編む」のような動詞の構造の共通点も捉えやすい。働きかけの手段と変化する状態の指定は以下の(8)に示した位置に付与される。

(表7)「焼く」「編む」「作る」の分析

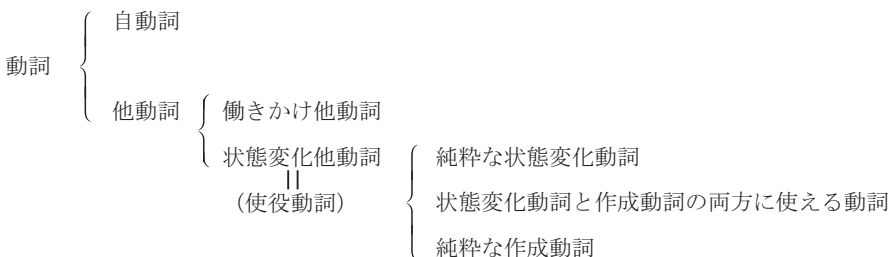
	状態変化動詞としての使用	指定の働きかけ	指定の状態への変化
焼く	あり	火を用いて	火が通った状態になる
編む	あり	糸状のものを組み合わせる	糸状のものが組み合わせられて形になる
作る	なし	なし	働きかけを受ける場合、働きかけの前とは、性質・状態・用途などが異なるものに変化

(8) [[x ACT] CAUSE [y BE AT z]]

↑ ↑

<指定の働きかけ> <指定の状態への変化>

以上の分析から次のことが分かる。作成動詞と状態変化動詞は、結果目的語を取るか被動目的語を取るかという違いはあるが、同じ LCS 構造で分析できる。その中でも、「焼く」や「編む」などの動詞は、作成動詞と状態変化動詞のどちらとして使用する場合でも、働きかけの手段や変化すべき状態の指定を含めて全く同じである。「作る」は状態変化動詞としては使用できない純粋な作成動詞である。「焼く」や「編む」を作成動詞として用いた時と比べて、手段を問わずに作成を表現できる。しかし、結果事象において、起因事象の前にあったものとは性質や状態、用途などが異なったものが存在することが必要である。最後に、本論文が状態変化動詞（使役動詞）の下位分類をどう想定したのかと共に、作成動詞が動詞の分類においてどの位置にあるのかを整理し、図 1 に示す。



(図 1) 動詞の分類における作成動詞の位置

参考文献

- 小野尚之 (2005) 『日英語対照研究シリーズ (9) 生成語彙意味論』 くろしお出版
 影山太郎 (1996) 『日英語対照研究シリーズ (5) 動詞意味論』 くろしお出版
 影山太郎・由本陽子 (1997) 『日英語比較選書 8 語形成と概念構造』 研究社出版
 金水敏 (1994) 「連体修飾の「～タ」について」 田窪行則編『日本語の名詞修飾表現』 くろしお出版 pp.29-65
 國廣哲彌 (1981) 「第 1 章 語彙の構造の比較」 國廣哲彌編『日英語比較講座 第 3 巻 意味と語彙』 大修館書店 pp.15-52
 都築雅子 (2015) 「Ⅶ. コーパスと語彙意味論研究 加熱調理動詞の使役交替性」 深谷輝彦・滝沢直宏編『英語コーパス研究シリーズ 第 4 巻 コーパスと英文法・語法』 ひつじ書房 pp.141-168
 東京大学言語情報科学専攻編 (2011) 『言語科学の世界へ ことばの不思議を体験する 45 題』 東

京大学出版会

森山新編著 (2012) 『日本語多義語学習辞典 動詞編』 アルク

由本陽子 (2005) 『ひつじ研究叢書 (言語編) 第40巻 複合動詞・派生動詞の意味と統語』 ひつじ
書房

由本陽子 (2011) 『レキシコンに潜む文法とダイナミズム』 開拓社

Abstract

This article examines the Lexical Conceptual Structures (LCSs) of creation verbs in Japanese. Two possibilities have been proposed in previous studies for creation verbs: (1) $[[x \text{ ACT ON } y] \text{ CAUSE } [y \text{ BECOME } [y \text{ BE AT } z]]]$, (2) $[x \text{ CAUSE } [\text{BECOME } y \text{ BE } [\text{AT } z]]]$. Here, $[x \text{ ACT ON } y]$ represents the initiating event, and $[\text{BECOME } [y \text{ BE AT } z]]$ represents the result. The first LCS indicates that the subject acts on the object in the initiating event, but the object of creation verbs does not exist before the initiating event. The second one cannot capture the meaning of such verbs as *yaku* 'bake, burn, roast' and *amu* 'knit', which can serve either as creation verbs or as change-of-state verbs. To overcome these difficulties, this article examines the truth values of sample sentences with those verbs against various situations, and proposes the LCS: $[[x \text{ ACT}] \text{ CAUSE } [y \text{ BECOME } z]]$. It is shown that this LCS is appropriate for cases where those verbs are used as creation verbs and for cases where they are used as change-of-state verbs. It is also shown that the same LCS captures the meaning of the pure creation verb *tsukuru* 'make, form, compose, manufacture', which has no restriction on the manner of creation but requires that some action on the part of the agent brings about the existence of the object that has not existed before the action.

1 影山・由本 (1997) では、 x, y, z を [] のラベルとして示しているが、本論文ではこれらを意味述語の変項とする表記に統一する。